私のフランス

中村真一郎

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮社

© Shin'ichiro Nakamura 1997, Printed in Japan

私(わたし)のフランス

一九九七年一〇月三〇日発行

著者 中村真一郎(なかむらしんいちろう)
発行者 佐藤隆信
発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二―八七一一
電話 編集部(03)三二六六―五四一一
読者係(03)三二六六―五一一一
振替〇〇一四〇―五―八〇八
印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。
ISBN4-10-315519-1 C0095

私のフランス・目次

第一章　私のフランス滞在記（一九七二年）　7
1　フランス入国　9
2　古いパリ　14
3　沼地（マレー）　16
4　二つの王宮　21
5　シャン・ゼリゼーあたり　28
6　七月十四日　36
7　二つの森（ボワ）　41
8　墓地と寺　51
9　左岸への散歩　56
10　人と部屋　66
11　フォンテーヌブロー　74
12　渓谷と住宅地　80
13　ネルヴァルの旅とイリエ・コンブレー　86
14　ロワールの城　100
15　ブルゴーニュ　111

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第二章　『宇津保物語』と『サチュリコン』
（コレージュ・ド・フランスでの講演草稿・一九九四年）　127

第三章　本をめぐって（一九九五年）　147
1　徂徠の二面性――野口武彦著『荻生徂徠―江戸のドン・キホーテ』　149
2　スペイン古典文学の紹介――セルバンテス『模範小説集』　152
3　尾崎紅葉全集刊行の機会に――『多情多恨』を再読　155
4　『世界の中の日本絵画』――平山郁夫・高階秀爾　158
5　前衛作家の処女作――ヘンリー・ミラー『モロク』　161

第四章　ジェラール・ド・ネルヴァル論
或いは　近代末期精神の典型（東大仏文科卒業論文・一九四〇年）　165
一九九七年の序　167
序　173
1　政治　或いは『悲歌と諷詩』　177
2　伝統　或いは『十六世紀詩人論』『十月の夜々』　180

3 ドイツ　或いは『ファウスト』 183
4 幻想　或いは『艶美な放浪』『火の娘ら』 186
5 抒情　或いは『小抒情詩』『悪夢篇』 190
6 郷愁　或いは『レオ・ビュルカル』 194
7 高踏　或いは『暁の女王と精霊の王の物語』 197
8 売文　或いは『演劇世界』『東方紀行』 200
9 社会　或いは『見神者たち』 204
10 追憶　或いは『シルヴィ』 207
11 地獄　或いは『夢と人生』 210
結語 214
ジェラール・ド・ネルヴァル（一八〇八～一八五五）生活年譜抄 216
注 221
参考書目 239
あとがき 242

私のフランス

装画　中村真一郎
装幀　新潮社装幀室

第一章　私のフランス滞在記（一九七二年）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

1　フランス入国

フランスに入るには、二つの方法がある。

ひとつは歴史的な入り方で、シーザーの軍隊と共にアルプスを越えて、いにしえのゴール（ガリア）の地に侵入する、という方法である。

ローマの将軍シーザー（ユリウス・カエサル）は、紀元前五八年、数万の大軍をひきいて、地中海岸から北上し、先住民族であるゴールの諸部族と戦い、それを征服して、そこにローマ的文明を導入した。その征服戦はシーザー自身の手になる『ガリア戦記』により、審さに知ることができる。

この戦いはシーザー自身を、初代ローマ皇帝の座に近付けることになると同時に、フランスという国を、文明へ向って出発させる、つまりゴールの地を、フランスという国の形式へ向けて出発させることになった。

今日、私たちはラテン語を習いはじめると、最初に読まされるテキストが、この『ガリア戦記』なのだから、このなじみ深い本によってフランスへ入るというのは、ひとつのやり方である。

もうひとつの入り方は、今度は地理的な方法で、それはフランスの中心であるパリの、その中

心である第一区から始めるという方法である。
御承知のように、フランスの首府パリはセーヌ右岸の小さな村から、次第に発達して拡大されて行った。そして現在は、その古い街を第一区として、右巻きのカタツムリ状に、第二区、第三区……と行政上の区割をつけられ、二十区にまで至っている。（丁度、江戸の都市計画が千代田城を中心にして、左巻きに拡げられていったように。）
その第一区から話をはじめるという方法である。
幸い、この原稿の計画をたてはじめた頃、私はそのパリ第一区のある家具付きアパートで暮していた。そこで、おのずから、この二番目のやり方で、パリとフランスとについて語ろうという方に、計画が落ちついたわけである。
私の住んでいたのは、フランス国立銀行の正面玄関から旧中央市場へ向うコキリエール通りの途中を、ちょっと左へ入った小さなエロルド街の左側の小さなホテルである。
ホテル――フランス流の発音だとオテル――という言葉は、日本での使い方よりも範囲が広い。その言葉の歴史的な変遷をたどって、意味が重なっているからである。
古くは館（やかた）、邸宅というような意味で、今日でも、「市のホテル（オテル・ド・ヴィル）」といえば、市役所のことであり、「神のホテル（オテル・ド・ディユ）」といえば、国立施療病院のことである。
日本から到着した、ある観光客が、オルリーの飛行場でタクシーをつかまえ「パリ第一のホテルへ連れて行け」と命じたところ、運転手は市役所に案内した、という有名な笑い話がある。
本来の旅館としてのホテルも、日本の洋風ホテルよりは種類が多く、私のいたアパートか下宿屋のようなところも、ホテルの看板を出している。

私の住んでいた建物は五十世帯くらいの人たちがいたが、いずれも住みついていたので、短期の客は泊めていなかった。

そうして、いわゆるフロントもないし、五階建てであったが、エレベーターもない。

ついでながら、パリの昇降機について一言しておくと、そもそも西欧の都市というのは、建物も道路も古くから石で作られていた。だから、日本のように木と土とでできている町のように、簡単に壊すわけには行かない。従って戦争か地震でもない限りは、古い石の建物のなかを、時代に応じて少しずつ改造して、新しい生活に適用するようにして行く。

そこで、都市の既にでき上っているところへ、新しいものが入ってくる場合、その入り方はおのずから制約されるので、たとえば古い建物に新しいエレベーター（アサンスールという）を取りつけるには、大概、建物中央の螺旋階段の、真中の吹き抜けの隙間に作るということになる。その隙間を拡大するのは、石の積み上げの一部を取りはずすことになって、到底、簡単には行かない。そこで隙間が狭いと、荷物なしで三人の人が身体を寄せ合って、やっと入り、身動きできないという、小型のものができ上る。

しかもその箱は、近代アメリカ式の扉はついていないで、大概、蛇腹のような細工になっているから、素通し同然である。だから階段の光景を見物しながら上昇して行くことになる。廊下に立つ女性の脚の研究に熱意のある人には、まことに格好な道具であるが、私はこの小さな箱に乗るのは恐ろしくて仕方なかった。あるホテルで、この箱が途中で停ってしまい、太った中年のアメリカの婦人を救け出そうとして、その膨大な肉体の下敷きになってしまった、深刻な経験が私にあったからである。

が、そうしたオモチャのような箱も、私のホテルにはついていなかった。だから住民や訪問者は階段を上らなければならない。重いトランクを上階までひきあげるのは、大変な労働である。勿論、フロントもいないのだから、ボーイもメードも雇われてはいない。

しかも、これが夜となると、廊下、階段などの電気は消されている。壁のボタンを押すと電気がつくが、それもものの一分もすると消えてしまうから、階段の途中で道草をくうのは論外である。その上、パリでは住宅はほとんどアパート仕掛けになっていて、五階建て以上なのである。二階建ての独立家屋などは存在しない。そこで、従って日当りの悪い部屋も多い。だからパリ人は、日中、太陽を求めて部屋の外で暮すことになり、あの無数のカフェなるものが、あらゆる通りに存在していることにもなる。

そういうわけで、昼間も電気をつけておく必要のある部屋が多い。それなのに、電気の設備は甚だ旧式である。旧式というのは、歴史的に早い時期に、パリには既に電気が引かれたという意味で、しかし石の都市では簡単に近代化の工事は困難だから、旧式のまま、不便を我慢しているということになる。

パリは二回にわたって電化が行われ、その二回で——丁度、日本で関東と関西とがそうであるように、——ヴォルテージュが異っている。従って電気スタンドひとつにしても、パリ市内でうっかり引っ越しをすると、使えなくなる。しかも二回の工事から外れた地区は、まだ電気なしの生活だという。電話にしても同様であって、間違いや混線を面白がる趣味の人には、パリの電話は実に興味津々の道具なのである。中世以来の巨大な石のかたまりであるパリという都市に、工事を行うということが、どれほどの大事業であるかは、日本の生活様式に慣れた人々の想像を絶

するのである。

だから、パリは新しい近代的都市を、郊外に別に建設中である。ロンドンやローマ同様に。その方が古いパリを作り直すより、遥かに簡単なのである。

それではフロントのないホテルへ訪ねて来た人はどうするか。門番兼管理人の部屋がある。この管理人が有名なコンシエールジュという存在で、彼等はその町の主である。その地区の共産党の細胞の中心は、どこでも大概、このコンシエールジュ人種だということになる。だから、党が文化の大衆路線を採用する場合、彼等の教養水準に合わない、たとえばピカソの絵だの、前衛的な詩などは、屢々、粛清の危機に瀕することになる。

電話もこのコンシエールジュが管理している。私のいたホテルは平日、午前八時から午後八時まで使用可能、ただし日曜祭日は不可。またコンシエールジュが上階の廊下を掃除中だったり、外出中だったりすれば、やはり不通という不便さである。普段は電話室の鍵はかかっているから、かけるにはいちいちコンシエールジュをつかまえる必要がある。

しかし、これはまだいい方で、こちらからは掛けることができても、それは先方のコンシエールジュに、ことづけすることができるだけで、先方は改めて、外へ出て公衆電話で掛け直さなければならない、という仕掛けのものもあった。

西洋は先進文明国だから、さぞ全て近代文明の設備が発達しているだろうと思うのは早計で、古く文明の固着したところは、それだけ古いものが取り除きにくいのである。

電気についてもう少し書くと、実はフランス人の眼は、日本人に比べて暗さに強くて明るさに弱い。私たちが到底無理な暗さの中で、彼等は平気で新聞などを読んでいる一方、私の部屋へ入

ってくると彼等は、まっ先に明かりを暗くしてほしいと頼む。まぶしすぎて眼が痛くなるというのである。日本人の色眼鏡は大部分、おしゃれであるが、彼等は直射光のしたでは、黒眼鏡なしでは過せないようである。私は眼鏡の発達していなかった、十八世紀までの旧政体の頃は、人々はどうやって太陽光線をふせいだのだろうかという、疑問を禁じ得なかった。

こうしたデリケイトな眼のために、街燈の照明も、中々気をつけた配置になっている。

大通りは深夜でも明るい街燈、それが脇道に入ると街燈は暗くなり、家へ戻ると廊下は更に暗くなるという具合で、つまり、外から家へ帰るまでに、心理的に次第に落ちつき、眠りが準備されるというふうの配慮が行われている。

これはガス燈時代からの習慣なのだろうが、そうした配慮が文明というものなのである。

2　古いパリ

私の住んでいたあたりは、パリで最も古い地区であった。

何しろ、直ぐそばの中央市場（レ・アール）は、中世以来そこに存在し、市場前は東京の魚河岸のように、新鮮な材料の料理屋が、終夜営業でやっている。そこには、血のついた白い上っ張りの男たちも、又、お洒落な社交界の人たちも、それから又、観光客も食べにやって来て、深夜に肩を並べて坐っている。

それらの料理屋は、中々、それぞれにうまいものを食わせるが、その店の名も「豚脚亭（オ・ピエ・ド・コション）」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co